



後の時代の人によって書かれた歴史物語と事件の当事者がまとめた文章を読み比べさせる問題が出題

共通テスト

河合塾

第3問

夏期講習 高3・卒 共通テスト対策古文 第1講 問5
夏期講習 高3・卒 共通テスト対策国語(古文) 第1講 問5

【文章Ⅰ】
院も我が御方にかへりて、うちやすませ給へれど、(ア)まどろまれ給はず。わりなき。「さしはへて聞こえむも、人聞きよろしかるまじ。いかがはせむ」ひたち給へれば、うとうとしくならひ給へるまに、(B)つつましき御思ひなむは、あかず口惜しと思す。けしからぬ御本性なりや。
(注1) 院は、あかず口惜しと思す。けしからぬ御本性なりや。
(注2) なにがしの大納言の女、御身近く召し使ふ人、かの齋宮にも、さるべきゆ「なれなし」を思ひ寄らば、とぞ少しけしき呈せて、思ふ心の十世とBせちにえかに消え

【文章Ⅱ】
齋宮は二十に余り給ふ。(イ)ねびととのひたる御さま、神もなごりを慕ひ給も、よそ目はいかがとあやまたれ、霞の袖を重ねるひまもいかにせましと思内は、いつしかいかなる御物思ひの種にかと、よそも御心苦しくぞおぼえさ御物語ありて、神路の山の御物語など、絶え絶え聞こえ給ひて、

女院は、法皇の御時より、(イ)御まじりて、三巻の里とて聞こせしは、御戒の師と聞こづ女院の御まじり心かしこく何
【文章】
「今鏡」の和歌Xが詠まれたのと同じ頃に、同じく美福門院の死を悼んで詠まれた歌が、藤原俊成の私家集『長秋詠藻』にも記されている。その詞書には、故女院、霜月の二十三日かくれさせ給ひて後、御遺誠にて、御舍利をば高野の御山になむ納め奉りしを、師走の四日にや、かの御山に着かせ給ひし日、雪のいみじく降りし朝に、侍従大納言入道「今日御山に着かせ給ふらむこと」など消息ありし返事についでにつかはしける
と書かれており、俊成が藤原成通(詞書では「侍従大納言入道」)に詠み送った歌は、
Y 後れるて思ひやるこそ悲しけれ高野の山の今日のみゆきを

共通テストでは「異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題を含めて検討する」という方針を打ち出している。たとえば、本年の本試験では、歴史物語『増鏡』と、その本文に語られた事件を経験した当事者が記した日記『とはずがたり』を読み比べさせる問題であった。河合塾の教材でも、歴史物語『今鏡』と、その本文に語られた事件を経験した当事者がまとめた『長秋詠藻』の記述を読み比べさせる問題を扱っている。